

# 事例紹介

国立国際医療研究センター  
トラベルクリニック  
看護師 福島 有希

# 神経損傷疑い対応事例



## 【対象患者】

- 40代、女性。
- 左上腕に筋肉注射2本実施。

## 【症状出現と経過】

- 数週間後に左手指にしびれと疼痛の訴えあり。

## 【対応内容】

- 痛みによる筋力低下の訴えあり。
- 神経内科、麻酔科を受診。
- 神経障害性疼痛の疑いと診断。
- プレバガリン処方、リハビリテーションを指導

# 迷走神経反射対応事例



## 【対象患者】

- 20代、痩せ型の男性。
- A型肝炎、狂犬病、DPTの3本を接種。
- 予防接種や採血時での気分不快の経験はなし。
- 接種当日は朝食・昼食を摂取せず来院。

# 【症状出現と経過①】

接種直後、顔面蒼白となり、意識消失。ブザーで医師を呼ぶ。  
呼びかけですぐに意識は戻ったがめまいと顔面蒼白、末梢冷感あり。  
血圧110/54mmHg、脈拍48回、SpO<sub>2</sub>：99%。  
呼吸状態問題なく、皮膚症状出現なし。  
安静後、脈拍58回まで回復。

## 【対応】

接種直後、そのままリクライニングチェアで仰臥位となり下肢挙上。  
バイタルサイン、観察。  
医師の診察で、迷走神経反射のため15分安静にするよう指示あり。  
安静後、立位時のふらつきがないことを確認し、待合の椅子で15分休む。

## 【症状出現と経過②】

本人より「**気分が悪いです**」と申し出あり。

処置室に移動し、リクライニングチェアに座った直後、再度**意識消失**あり。

呼びかけで意識はすぐに戻った。

**血圧98/46mmHg、脈拍55回、SpO2：99%。**

## 【対応】

医師診察あり、2度目の意識消失のため慎重な経過観察が必要と判断し、

ストレッチャーにて一般内科外来へ移動し、経過観察を行った。

その後軽食をとり、1時間ほどの安静で症状軽快し、独歩にて帰宅された。

次回以降、採血や注射接種時には、**迷走神経反射の既往を必ず伝えることと**

**事前に食事摂取を行うよう指導をした。**

# アナフィラキシー対応事例

## 【対象患者】

- 20代女性。
- インド、アメリカ渡航目的でのトラベルクリニック受診。
- トラベルクリニックでのワクチン接種は3回目。
- 腸チフス・狂犬病・A型肝炎ワクチンの3本を同時接種。  
腸チフス・A型肝炎ワクチンは初回投与。
- エナジードリンクで蕁麻疹あり、マンゴーアレルギーあり。

# 【症状出現と経過①】

## 1、接種35分後

腸チフス・A型肝炎・狂犬病ワクチン投与前、投与直後の体調不良なし。

「口の周りがかゆいです」

口唇周囲の掻痒感と発赤に気付き、会計より徒歩で戻る。

→血圧118/89mmHg、脈拍85回/分、SPO<sub>2</sub> : 98%

口唇周囲の発赤あり。

呼吸困難感なし、腹部症状なし、受け答え明瞭。

「首もかゆくなってきました。」

→血圧122/76mmHg、脈拍86回/分、SPO<sub>2</sub> : 100%

顔面から頸部にかけて紅潮の広がり確認。

呼吸困難感なし、腹部症状なし、意識清明。



## 2、接種1時間後

「上あごの腫れぼったい感じはあります。かゆみはないです。」

→血圧116/85mmHg、脈拍99回/分、SpO<sub>2</sub>：98%。

顔面の紅潮、腫脹あり、手背に発疹あり、掻痒感なし。

呼吸困難感なし、腹部症状なし、意識清明、受け答え明瞭。

### 3、接種2時間後以降

「喉の違和感は少しあります。風邪のひき始めみたいな感じ。」

→BP107/56mmHg、脈拍90回/分、SPO2：99%

皮膚の紅潮は消失

呼吸困難感なし、腹部症状なし、意識清明

## 【対応】

- アレルギー反応疑い

救急外来へ車いすにて搬送

→ポララミン・ファモチジン投与

- 投与後皮膚症状は改善傾向

呼吸困難感なし、腹部症状なし、意識清明

→経過観察のため車いすにて一般外来へ移動。

- 皮膚の紅斑消失、咽頭違和感軽度あり。

→抗ヒスタミン薬処方

入院も考慮されたが、ご本人と相談の上、症状出現悪化時に救急外来を受診するよう伝え、自宅へ帰宅した。

## 【症状出現と経過②】

・帰宅後、頸部の掻痒感の出現あり、抗ヒスタミン薬を内服。  
内服後、1時間半後に38°Cの発熱と咽頭部の詰まる感じを自覚。  
救急要請し、当院へ搬送。

搬送時：口唇のピリピリとした痒み、腹痛、咽頭違和感あり

→血圧134/70mmHg、脈拍126回/分、SPO2：99%

診察時には腹痛は改善していた。

## 【対応】

- ・ アナフィラキシー2峰性反応と判断

→ポララミン・ガスター、ヒドロコルチゾン投与

経過観察目的で入院となった。

翌日まで症状再燃なく、経過良好のため退院となった。

# まとめ

- 患者のささいな訴えを逃さず、真摯に対応を行う
- 症状の経過観察は特に慎重に行う
- いつどこで患者の急変が発生しても、誰もが対応できるようにスタッフ間の日頃のコミュニケーション・備えが重要！